

演題 「床副子製作の視点から考える補綴装置に付与すべき形態について」

佐野 和也

今日、歯科技工において CAD/CAM を代表するデジタル歯科技工技術が目覚ましい発展を遂げており、適合、コンタクト、歯冠形態などのクオリティーを追った進化のスピードには驚かされることばかりです。デジタル歯科技工は私たちの労働を少し楽にしてくれます。しかし、機械が製作してくれるのは、歯科技工士が設計した形を様々な材料に置き換えることであり、“考えて作る”ということではありません。故に、古典的な製作技法であっても、最新鋭式の機械であっても、“考えて作る”という歯科技工士の仕事は必ず必要になると思います。

歯科技工において“考えて作る”ということは、補綴物の外形のデザイン、構造体としての強度、歯の色、歯の形、材料の耐久性、適合、コンタクト、バイトなどが歯科技工士の考える基本的なことだと思います。患者の体を歯から健康にするために、ということを考えると歯科技工士は少し視野を広げて思考する必要があると思います。咬合再構成などの補綴をするためには、下顎位、顎関節、筋肉、骨格、呼吸などを考えた床副子（スプリント）の製作技術や生体に適応した咬合平面をデザインする能力が必要になります。

デジタル化によって少しずつ変化していく我々の働く環境ですが、歯科の役割を少しずつ知るたびに歯科医療の一端を担う歯科技工士の仕事の重要性や歯科の可能性を感じています。今回の講演では従来型の歯科技工とは少し違った模型の見方や考え方、歯と筋骨格とどのような関係性にあるか、補綴装置が患者に与える様々な影響を歯科技工士としてどのように考えているかということをお話しさせていただこうと思います。

演題 「アナログ技工とデジタル技工の再考」

三輪 武人

歯科技工に CAD/CAM 製の補綴装置が普及し始めてから現在、その流れは加速度的に増加しているように感じている。デジタル技工はデータの活用方、デジタルデザインの習得方、それに伴う考え方などまだまだ確立されていないのが現状ではなかろうか。一方アナログの補綴装置は先人達による知恵により、匠の技を継承し発展させ現在普遍的に扱われている。しかしながらその中でも間接法、ヒューマンエラー等の問題も存在する。その様な中で今一度アナログ技工とデジタル技工を再考し、今後の歯科技工を考える機会としたい。